



女性会計士が 世界で活躍するために

株式会社コンフォートコンサルティング 代表取締役社長

矢野 奈保子 Nahoko YANO (写真左)

(会計・監査インフラ整備支援対応専門委員会専門委員)

大学卒業後、事業会社勤務を経て(現)新日本有限責任監査法人にて、一部上場企業を中心に監査業務に従事しつつ、主に財務会計業務を対象とした経営改革コンサルティングに従事。その後、シンクタンクにて公的機関の財務会計改革、行政評価、調査案件などに従事するとともに、引き続き民間企業に対して業務改善、資金管理指導、グループ組織再編再生、人材育成等のコンサルティングに従事。2008年2月に株式会社コンフォートコンサルティングを設立し、公的機関及び民間企業の業務に従事するほか、ODA案件にも従事。

Accountaxこだま会計士事務所 代表

兒玉 久実 Kumi KODAMA (写真右)

(会計・監査インフラ整備支援対応専門委員会専門委員)

大学卒業後、金融機関勤務を経て青年海外協力隊(ミクロナシア連邦に派遣)に参加。その後、(現)有限責任監査法人トーマツ大阪事務所に入所、製造業やアパレル業を中心とした企業の各種監査業務に従事。2013年7月よりデロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー合同会社に転籍、M&Aや再生DD、FA業務に従事した後、国際開発アドバイザーサービス部門に異動。主に開発途上国における公共財政管理や内部監査制度構築業務等に従事。2018年2月に退職後、Accountaxこだま会計士事務所を開業するとともに、会社設立準備中。



一矢野さんがご自身で会社を設立された経緯から教えてください。

矢野 もともと監査をしたいとか公認会計士になりたいというより、どちらかというとコンサルティングをやりたいと考えていまして、監査より経理業務の改善やシステム導入前の基本構想などの業務をメインに取り組んでいました。そんなとき、ちょうど監査法人の中で、初めてODA案件を立ち上げることになったのでそのプロジェクトに参加しました。また、同時に公会計や行政評価などにも興味があってもう少し行政寄りの仕事をしたいという思いがわいてきました。それができる職場を探しているときに見つけたのが銀行系のシンクタンク。会計士になって7、8年が経過していた段階で移籍したのですが、そこでは、行政系の仕事はたくさんできたのですが、ODAの仕事ができなくて。だったら、もともと独立に向く会計士の資格を持っているんだし、独立してしまおうと決意しました。当初は個人事業主として仕事を受けていたのですがJICAの仕事をするようになった頃に法人化。民間企業や行政系の仕事をしながら、機会をみながら、少ししかできませんが、ODAの仕事もやってい

こうと思っています。

兒玉 矢野さんは、どうしてODAに興味を持ったのですか。

矢野 学生時代に在籍していたサークルで、国際政治や国際関係などを勉強しました。メンバーでよくディスカッションをしていたのが、どこか頭の中に残っていたのだと思います。だから、監査法人に入ってから、例のODAのプロジェクトに手を挙げて参画したんですね。監査法人で初めての案件でしたので、みんな手探りでしたが、そのプロジェクトが楽しくて、また現地の人と一緒に仕事をするのもすごく楽しかったんですね。

兒玉 矢野さんはちゃんと勉強もして段階を踏んで経験を積んでこられたからこそ、綺麗なカタチでODAにも関わっているんですね。

矢野 いえ、ひとりでも折々の仕事だと限界があって。やはりチームで日常的に仕事をするほうがいいのですが、そうすると大手の監査法人に所属するか、ODAの

コンサル会社に所属する方が色々な経験が積めるのかなというのはあります。特に会計士絡みのODA案件は限られていますね。

兒玉 確かに、今のODA業界においては、会計士が参入している分野が非常に限られていますもんね。案件形成団体の方々もまだまだこれからの分野だと思っていらっしゃるんですよね。そこは私たちの方から、内容のご提案をしていくべきなのでしょうね。

矢野 インフラや衛生、教育など優先すべきことがまだまだたくさんありますから、そういったものが整ってきた次の段階で社会の経済基盤を整えるフェーズへと移っていく、ようやくそういう段階に入りつつあるような気がしますが、まだまだニーズは少ないですね。兒玉さんはどうして会計士を目指されたのですか。

兒玉 当初銀行に就職したのですが、就職活動時代に見つけたポスターがきっかけで、どうしても気になって仕方がなかった青年海外協力隊に行くために退職しま

した。協力隊時代は現地のカレッジで日本語教師をしていたんです。そこで私の生徒の中に40~50代の方々も何人か居て、彼らは若かった頃にあまり教育を受けなかったからという理由で、熱心に勉強している姿やバイタリティを目の当たりにしてものすごく刺激を受けました。そこで、帰国したらもう一度ちゃんと勉強しようという気になったんです。帰国後は様々な出会いがあったなか、大学の恩師にも相談に行きました。すると恩師は、「今から大学院に行っても当時の専門分野に関係する研究者は大勢居すぎるので後発組になってしまう。それだけの時間をかけて勉強しようと思うのだったら、簡単には取れない資格を取ればいいのでは？例えば医師や弁護士とかね。」と勧められました。その帰りに書店で資格のパンフレットをもらって検討し、予備校に足を運んで情報を仕入れたり、説明を聞いたりしたなかで、最終的に無知分野ではありましたが、会計士に決めました。とにかくまずやってみよう精神ですかね…(笑)しかし、矢野さんのようにコンサルタントになりたいと思っていた人が会計士になるという流れも、ある意味、ユニークですね。

矢野 会計士になる前に勤めていた企業で、会社全体の業務改善の大きなプロジェクトに参画して、業務を改革していくことに興味を持ちました。それをずっとやっていける職業って何だろう？サラリーマンではなく、自分でやっていける仕事は何だろう？と調べていたら公認会計士という仕事が見つかったのです。会計士って、会社の悪いところをつつくのではなく、医師のように診断することもできるし、治療することもできるし、公認会計士の資格を使って、多くの人がコンサルタントになっているということを知って。それに、一番、つぶしがきくのかもと思って。ということで、もともと監査がしたかったわけではなく、コンサルティングのような仕事をしたかったんですね。でも、実際にやってみると監査の仕事はすごく役に立つのだということがわかりました。会計士試験の勉強は素

振りみたいな要素があって、反射神経的に解けないといけないレベルが求められる問題も多くて、実際に現場でも次から次に色々なチェックをする必要がある一方で、色々深く考える力も必要ですね。

兒玉 本当にそうですね。それに、会計士の醍醐味は色々な会社に行って、一般従業員では見られないような重要な意思決定や大事なポイントを知ることができる点にあると思っていて、最短距離で会社の中身を知ることが出来るし、経営者層の考え方に触れられるのが凄いなと。その会社に就職していないのに、ですよ。

矢野 日々の資金繰りや伝票にはじまり、取締役会の議事録まで見る事ができます。内部統制や会社の動きや仕組みが身についてくる、しかも会計士になりたての若造が、ですよ。すごく良い職業ですよ。監査の最後の講評の時には、CFOとかそれなりの立場の方と対峙して話をしなくてはなりませんから、話をしながら人間力が鍛えられる部分もあります。

—今の業務でやりがいを感じる場所はどの部分でしょうか？

矢野 現在、ODAの業務は6月と12月に実施していて、ウズベキスタンの方々に経営理念の重要性やヴィジョンを明確にして経営をしていかなければならないといった研修やコンサルティングをしています。当初は「ビジネスはお金をもうけることなのに何で理念が必要なのか？」という疑問を投げかけられたりしたのですが、議論を深めながら理解していただいたときにやりがいを感じています。また本邦研修とあって、現地の方に日本に来ていただいて、日本のものづくりの現場で研修を受けてもらうこともあるのですが、従業員を大事にしたり、研修をしっかりしたりといった日本的な経営の仕方を伝えられることにも意義を感じています。

兒玉 私の場合は、相手が政府機関だったりすると、微力ながら制度導入等で国づ

くりに関与できることにやりがいを感じます。とはいえ、想定外な事態の頻繁な発生に挫けそうにもなりますが…。また、私は一年の半分ぐらいはモンゴルに行っていて、現地の方々とそれだけの時間を過ごすことで信頼関係を築いたうえで、業務が出来ることは有意義だと感じています。ただ、現地に何年も張り付いて頑張っている人たちも居て、自分もそのくらいしっかりコミットしてやりたいと思うこともありますけど。行き来していると、私たち日本人が来たときだけしっかりやって見せる、みたいなこともありますから。

矢野 そうですね。私も日本での仕事もありますし、私の場合はもっと短くて、今は、たかだか2~3週間程度しか現地に滞在しないので、やはりどこかに後ろめたさみたいなものはあります。この国の状況をちゃんとわかっていないけれども、せっかく日本人が来たのだからという感覚で対応してくれているのではないかという、一種のもどかしさのようなものはありますね。

兒玉 そうですね。さらに勉強になったのは、日本人って、自分たちの国が先進国でいい国だと思っていますよね、きっと。確かに、信頼がおけるし、効率化が図れている部分は多いのですが、それは私も含めて自分たちが日本人だから、そう思っているんだろうと思います。考え方も教育も宗教もぜんぜん違う環境で育った人にとっては、果たしてそれが良いかどうかはわからないと思えるようになりましたし、日本を客観的に見られるようになったことは良かったと思います。

矢野 なんとなく日本人は日本人のコミュニティの中で快適に過ごすような空気があって、「日本はここがいい」と日本人同士で確認しあう、みたいな内向きな感覚を持っていますよね。外に出ても全然違う文化の人と摩擦を起こさないように避けて暮らすやり方を知っていたり、政治の話をしなくていいとかあって。ウズベキスタンの人の方が、たとえば本邦研修のときに自国の

独立記念日にみんなで乾杯したり、堂々と政治の話をしたり、よほど自国に対するプライドを持っているようにも見えます。

一現在、日本では女性の社会進出についての議論が活発化していますが、これまでのご経験の中で感じたアドバンテージ、あるいはディスアドバンテージがあったら教えてください。

矢野 お子さんがいらっしゃる方を見ると、やはり出張があるのがつらいのではないかと思います。最近、大手の監査法人は時短勤務があったり、出張を避けることができたりするのかもしれませんが、監査などは出張がつきものですし。ただ、近年はITの進化によって、ずいぶん仕事しやすくなっていますから、棚卸は仕方ないとしても、TV会議も活用できるし、電子帳簿を導入している企業では、東京にいながら日本全国の帳簿や証券を見ることができるようになっていますからね。

兒玉 そうですね。昔に比べたら随分効率的になって働きやすい環境に近づいていますよね。その便利さが逆に、お子さんがいらっしゃる方が時短勤務を活用して早めに帰宅しても、お子さんを寝かしつけた後に、もう一度、仕事が出来てしまう環境になったという…。それもまたある意味、大変ですけどね。

矢野 そうですね。特に監査の場合は、そもそもパソコンやデータ、資料を使うことができませんから、自宅でやれることも限られてきますしね…。

兒玉 確かに…。時短や在宅ワークなどフレキシブルな働き方により、皆が気分良く仕事できる環境になって、皆の意識改革が進めば、もっと平和になるでしょうね。海外だと、夕方職場に子どもが居たり、自由な時間に出退勤したりと、もっと伸び伸び仕事をしているように感じます。日本はそういった自由な環境への取組みを始めたばかりですし、この意味では発展途上国ですね。



矢野 そうですね。取り組みを始めている会社も少しずつ出てきているようですが、まだまだ…。日本全体が働くお母さんに優しくなると良いですね。夜遅くまで子どもを預かってくれるような施設が増えてくれたら、会計士だけでなく、多くの女性が働きやすくなるのでしょうか…。

兒玉 そうですね。世の中に半分いる女性の力がまだ眠っている気がしますね。その点、会計士はイメージ的には男女平等。そういう意味では女性も頑張ろうと思ったら、いくらでも頑張ることができるし、やりがいのある仕事ですね。日本以外の国々においては、会計士は女性の比率がもっと高いというイメージがありますね。

矢野 他の会計士にお仕事をお願いすることがあるのですが、女性はしっかり細かいことも把握して、「これを指摘して改善してもらおうのが仕事なのだから」と、そういった意識を持つ人が多いようにも思えます。もしかしたら女性の方が監査業務に向いているのかなと思うこともありますよ。

兒玉 男女では観点も違うし考え方も、体力も違いますもんね。これまでの世の中、特に日本社会はずっと男性社会でしたが、

今、女性がどんどん社会に出てきていますから、これが本当の意味でフィフティフィフティになると、随分社会が変わるように思います。

一国際業務に向いている人と向いていない人がいるかと思いますが、お二人はどういった差というか、要件があると思われるか。

兒玉 やはり語学力は大事だと思います。それにも拘わらず、私自身は苦手なのですが…。たしかに、語学も必要ですが、他の国の方々とうまくやっていくためには、まず何かをする時に大切なのが、相手の国や文化を理解すること。そして、その中に恐れずに入っていけるような方が適していると思いますね。

矢野 私も兒玉さんと同意見。語学力はないよりもあったほうが良いですが、私も英語が苦手ですが、それをカバーできることがあると思います。そもそも異文化に合わせるのがつらいと思う人にはあまり向いてないかなと思います。こんなに知らないことがあった、困ったことがあった、このドキドキは何?というようなことが全部楽しめる人は、どこに行っても環境を受け入れられますよね。

兒玉 あとは、普段からキャッチボールの会話をするのが苦手な人や協調性のない人が、日本の外に出たら心機一転うまくいくという事はあまり無いように思います。日本人も外国人もみんな同じ人間なので、根本の思想には共通点があって、どれだけ相手のことを信頼できるかという人間関係で成り立つことが多いので、国内外問わず、そこは大切だと思いますね。

矢野 確かに。以前ウズベキスタンで一緒に仕事をした方で、まったく英語ができないのに、ものすごく現地の人に慕われている日本人のおじさんがいらっちゃって、それはすごくうらやましかったですね。また、わずかなボキャブラリーでもいいので、英語以外の現地語を覚えて、少し会話をするとうごく喜ばれますよね。相手の母国語を覚えるということは、その国のことを理解しようとしている態度の表れと受け取められるのでしょうか。

兒玉 しどろもどろでも日本語で話して

もらうと一生懸命聞こう、助けてあげようと親近感がわくのと一緒にですね。人間はやはり、どこの国の人でも同じような感情を持っているのでしょうか。

一本日は、貴重なご意見をありがとうございました。最後に若手会計士へのメッセージをお願いしますでしょうか。

矢野 子どもが生まれたらグローバルな人に育てるために三つの言葉を覚えさせるという話があって、ひとつは英語、ひとつはプログラミング言語、そしてもうひとつが会計言語だといわれていて、公認会計士になれば、この万国共通の言葉のひとつをマスターできるわけですから、ある意味、非常にグローバルに近づくことができる仕事かなと思います。そんな公認会計士という職業を目指す人も含めて、若い会計士の皆さんに伝えたいのは、やはり目の前の仕事をしっかりやっていただきたいということですね。将来的にグローバルで活躍するから日本の基準はどうでもいいという話ではなく、目の前の仕事にっ

かり取り組んだうえで、何かが見えてきて、それがグローバルにつながったり、日本の中小企業の発展のためにできることに繋がったりするのだと思います。

兒玉 本当そうですね。私自身、会計士資格を取得したことで助けられている部分はすごくあって、出会う人も経験もそう。一般企業に勤めていたままだったら、なかなか出会うことはなかったのかなと思います。だから、これから会計士を目指す人も含めて若い会計士さんに対しては、監査という業務自体が会計士でなければできない仕事なので、そこはまず誇りを持ってしっかり貫き通してほしいです。さらにその先、監査のプロとして攻めていっても良いし、あるいはそこから発展して、少し違う方向にチャレンジしても良いと思います。そのときにも、資格と言うものが助けてくれることもあるかもしれませんし、経験は必ず役に立つので可能性が広がって、選択肢が生まれると思います。それらの中から自分のやりたいことや貢献できることを選んで、掛け合わせて、新しいものを生み出すこともできる。思考を変えれば、色々な場面で活かせる可能性のある資格だろうなと思っています。

このインタビューは2017年10月24日に実施されました。



 **日本公認会計士協会**
The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>